



第192回国際問題懇談会

近衛日本赤十字社社長が講演

「人道問題、グローバルに議論」

民間外交推進協会(FEC)は昨年12月17日、近衛忠輝日本赤十字社長、国際赤十字・赤新月社連盟会長をお迎えし、「赤十字活動と国際情勢」をテーマに第192回国際問題懇談会を帝国ホテルにて開催した。



近衛忠輝日本赤十字社社長

開催に際して、松澤建FEC理事長から、「本日は多忙中、FEC国際問題懇談会にお越し頂き感謝したい。赤十字社の活動内容を改めて調べると、重要な活動を多くされているのに気付く。現在の世界の状況を見ると、今後、赤十字社の活動はますます重要になってくるのではないか。このような時期に近衛社

長のお話を伺えることは大切だ」と主催者挨拶があった。

続けて、近衛氏から赤十字社の歴史、現在の活動内容などについて講演が行われた。近衛氏は設立者のアンリ・デュナンについて、「戦時下における救護活動の国際的・普遍的なルールを作った。それが真価ではないか」と語った。また、「各国赤十字の実績を平時に活かすため、1919年に国際赤十字・赤新月社連盟が設立された。現在、私はアジア人初の会長。元来、赤十字は西側主導であったが、途上国や新興国の影響力が高

まりその中で日本は良いポジションにいるのではないかと解説した。

東日本震災に際し、あらゆる復興支援事業に充てられた「赤十字・赤新月から届いた赤字に対する国際救済金1千億円の内の400億円は、クウェートからの原油(500万バレル)を換金したものと説明。また、別途被災者への現金支援として届いた国内外からの義援金約3600億円は、全額、被災認定を受けた世帯に対して各自自治体を通じて公平に配分された。今も受付は続いており、一定の金額が集まった段階で、さらに配分される。また、今後の展望について「冷戦時代には人道問題はイデオロギー色が強かったが、現在はグローバルに議論できるようになってきた。これは一つの希望になるのではないかと語った。

講演後は赤新月社との関係、連盟の総会決議の法的拘束力についてなど活発に質疑・意見交換が行われた。



近衛社長をお迎えした第192回国際問題懇談会の様子

常任理事会 会員入会、参与委嘱も

民間外交推進協会(FEC)は1月19日午後、常任理事会を開催し、金川千尋会長、藤田弘道常任理事、宮崎毅常任理事、原良也常任理事、松澤建理事長、石原達夫代表監事、事務局役員ら11名が出席した。写真。定款に基づき議長の金川会長が開会宣言をした後、松澤理事長が各議案についての説明を行った。第1号議案「会員の入会承認の件」では、前回の常任理事会(2015年11月10日開催)以降に入会申し込みのあった1社の法人、5人の個人および1名の駐日大使が、それぞれ法人会員、個人会員、名誉会員として承認された。第2号議案「参与委嘱の件」では、参与に細野太郎前直江津電子工業(株)社長が就任することが承認された。第3号議案「委員会副委員長等委嘱の件」では、人選中

「日中央アジア委」副委員長人事など承認

あった日中央アジア・コーカサス文化経済委員会副委員長に福田泰久センコー(株)代表取締役社長が、同委員会委員に鈴木史郎三興製鋼(株)代表取締役社長が就任することが承認された。第4号議案「訪問団派遣の件」では本年1月25日から2月2日にインドへ第10次インド訪問団を、2月28日から3月5日にカンボジアとタイへ第18次アセアン訪問団を派遣する予算が承認された。



主な記事

第14回LFEC東京研修 特別版

揺るぎない平和国家 胸を張って

齋木尚子外務省国際法局長が講演

外国人ジャーナリストから見た日本の諸課題

◇スウェンドリニ・カクチ日本外国特派員協会会長が講演

……A・B面

……C面

駐日ウクライナ大使

「緊密な友好関係を発展」

▽2015年12月18日=ハルチェンコ駐日ウクライナ大使 民間外交推進協会(FEC)の松澤建理事長と湯下博之専務理事は、イーホル・ハルチェンコ駐日ウクライナ大使(写真右)を訪問した。松澤理事長は「東日本大震災に伴う原発事故では、ウクライナは2000枚の毛布を含む救援物資を送って下さり、チェルノブイリの経験を踏まえていろいろ支援の手を差し伸べてくれたことに感謝している。そのウクライナが今厳しい状況にあるので、今日はそのお見舞いに伺った」と伝えた。ハルチェンコ大使は、「ウクライナは、本当に苦しい状況にあるけれども、日本政府からも力強いご支援を頂いている上、このように日本国民の方からも



お見舞いと激励をいただいで感謝に堪えない。私としては、どれくらい時間がかかるかわからないが、必ず問題は解決できると信じている。日本も領土問題を抱えているが、いずれ解決するよう希望している」と語った。また、「今回の訪問を含むFECのご協力には大変感謝しており、これからも緊密な友好関係を発展させていきたい」と感謝の言葉を述べた。

大使訪問

駐日トルコ大使

「激励の言葉に感謝」

▽2015年12月24日=メリチ駐日トルコ大使 民間外交推進協会(FEC)の松澤建理事長と湯下博之専務理事は、アフメト・ビュレント・メリチ駐日トルコ共和国大使(写真中央)を訪問した。松澤理事長は「トルコと日本の友好関係に鑑み、トルコが今厳しい状況にあるため、本日はその激励に伺った」と伝えた。メリチ大使は、「訪問と激励の言葉に感謝するとともに、自分としてもFECのお役に立てることは何でもしたいので言っしてほしい」と日本語で流暢に語った。



マテ茶と茶道で「一期一会」

東京から地球を真下に掘り進んでいくとウルグアイの沖合に出ると聞いたことがある。www.antipodr.comというサイトで調べたところ、確かにそのようである。日本でもあまり知られていないウルグアイだが、南アフリカワールドカップMVPのフォルラン選手がセレッソ大阪でプレーしたところ、世界で最も美しい大統領といわれたホセ・ムヒカ元大統領のスピーチが日本で絵本になってベストセラーになったこともあり次第に良いイメージで知られつつあるのはうれしい限りである。

暮らしてみると治安も良いし、気候も温暖、一人当たり牛肉消費量が世界一の年間60kg(日本人の

「大使」発 ウルグアイ便り



駐ウルグアイ
日本大使
田中 径子

お米の消費量は一人当たり年間55kgとそれに合わせるタナトワインとといった美味しいものもある。

しかしまだまだ慣れないのが真逆の事が多々ある事。星座が北半球とは逆さまに見えるし月の満ち欠けも逆。北半球では雨女だった私がこちらに来てから晴れ女になったのもそのせいだろうか? 何と言っても季節が正反対で皆様が日本でもこれを読まれる2月はウルグアイは真夏のバカンスシーズン。クリスマスはいまひとつ盛り上がり欠けるし第一サンタの扮装は暑くてかわいそう。

しかしそんな中で日本とウルグアイに共通する文化がある。それは「お茶」。コンピニで売られて

いる「太陽のマテ茶」を飲まれた方もいらっしゃるかと思うが実際のマテ茶は茶器(伝統的なものはひょうたんから作られる野球のボール大)に茶葉を入れ、茶こしのついた専用のストロー(ポンビーシャ)を差し込んで携帯ポットのお湯を注いでかなり濃い抽出液を飲む。マテの茶葉はビタミンやミネラル豊富で「飲むサラダ」とも言われ、多くのウルグアイ人はどこに行っても茶器と携帯ポットを持参している。ガソリンスタンドでも必ずマテ茶用のお湯を提供するタンクがあるといった具合。

私も毎日オフィスでマテ茶を飲んでいますが、約15年間専ら茶道をたしなんでいたものでこれ幸いと

機会があれば着物で茶道のデモンストレーションを行っている。皆さん茶道への関心が高く、お抹茶を美味しい美味しいと飲んでくださる。他の南米諸国ではお抹茶は苦いから好まない人が多いようですがこれもマテ茶のおかげ、ありがたい。また茶道の濃茶は回し飲みをするがマテ茶も親しい人の間では回し飲みの習慣があり、茶器を渡されたら全部飲み干すのがマナーである。相手が満足するまで何度でも回し飲みを続けるのも茶道と同じ。

マテ茶も茶道も共に人同士のコミュニケーションの大事なツール。これからも「一期一会」の精神で誠意を持って日・ウルグアイ関係にかかわっていききたい。

随想 会員

1) 貴協会(以下FEC)は、去る9月17日、高原明生東京大学大学院法学政治学研究所教授を招き、「習近平政権の今後と日中関係」をテーマとする第91回中国研究会を開催されましたので、私は同教授の講演を拝聴しました。講演要旨及び主な質疑は11月1日発行のFECニュースで報道されましたので、該ニュースを読む者は高原教授による上記テーマに沿った各主要項目の分類とそれぞれ説かれた内容を知らずして済ませたいと思います。ここで私が敢て申し述べることを許される

とすれば、それは上記テーマにも関わらず、高原教授は習近平政権の中国による南シナ海方面における島嶼に対する国際法を無視した一方的埋め立てによる現状変更、軍事基地化の恐れ(懸念)については全くふれていませんが、それは何故か。わが国

めぐりあいの不思議



顧問
柏木 薫
柏木総合法律事務所

2) ここで高原教授の明生という名前を聞いたとき、私の脳裡に浮かんだのは、戦前の陸軍士官学校の生徒時代からの戦友であり、学友でもあった高原友生君の事だ。

この度FECの企画により東大教授の明生氏が招請され、年齢差からみて明生氏はわが友人の友生君の子息に違いないと思われました。それ故講演後、明生氏に父親(と信ずる)友生君の最近の消息を尋ねたところ「数年前に死去した」と申されました。私は友生君の死去を初めて知り、心中驚愕すると共に返す言葉もなく、悔やみの言葉を明生氏に述べただけで会場を後にした次第でした。思わぬところで、戦友・学友の死を知ると同時に、人の縁というものに導かれ、めぐりあいの不思議を感じました。今後は、明生氏が東大大学院の教授として法学・政治学の研究に精進し、学者として大成されることを祈って止みません。



住友商事株式会社顧問
海老原 紳

日本の外交を考える時、隣の大国である中国にどう向き合おうかは、いつの日も大きな課題である。戦前の日本は、1915年の対華二十一条要求から満州事変を経て盧溝橋事件で日中戦争・第二次大戦へと突き進んでしまった。戦後は、1972年の日中共同声明による国交樹立に際し、国論を二分する意見の対立が見られた。そして今、強大となった中国にどう対応するかは、日本外交にとって難問そのものである。

中国の経済成長のすさまじさはもろろん、軍事力の伸びもすさまじい。中国の国防費は、この四半世紀で約40倍になっている。2005年には日本の防衛関係費より低かった中国の公表国防費は、2015年には日本の約3.3倍になっ

視点

日本の周辺では、尖閣諸島への中国公船による接近が日常化している。さらに、南シナ海における中国の行動は、「爪の誇示」そのものである。中国による南シナ海での岩礁の占拠は、数年前までは掘建て小屋を建てるくらいのものであった。それがこのところ急速に埋め立てを進め、8つの人工島を造り上げている。さら

南シナ海の難問

に、ファイアリークロス礁には、3千トン級の滑走路を建設し、試験飛行をした。中国は、2009年に国連事務総長に口上書を送り、南シナ海のいわゆる「九段線」の内側における主権等を主張した。まるで南シナ海を中国の内海にするがごとき動きである。

これに対し、米国は、10月に駆逐艦を人工島の12ヶ内で航行させた。米国の世界的な軍事戦略にとって、海と空における航行の自由は死活的に重要である。2013年に中国が東シナ海に防空識別区を設定した際も、米国は、あえてB52爆撃機を飛行させている。中国が東シナ海、南シナ海の制海権、制空権を握るようなことは決して認めないとの強い立場を示したものである。

日本がこのような中国の動きにどう対応していくのか、頭の痛い問題である。南シナ海は、日本のシーレーンに当たり、自由な航行が阻害されれば国益を大きく損なう。人工島は、国際法上領海を持たないので、法の支配を訴えるのは当然として、対中政策は、またまた日本外交の難問となっている。(前駐英国大使)

私たちは、お客様の保険代理人であることをお約束いたします。

企業のリスクマネジメントに取り組みおかげさまで40年

www.inss.jp

リスクマネジメント / 損害・生命保険業務

株式会社 **インシュアランス サービス**

一人を、ひとつを ありがとう

■本社 〒659-0094 兵庫県芦屋市松ノ内町1-10ラリーブ2F TEL 0797-32-8080 TEL 0797-32-9385

■東京支店 〒160-0004 東京都新宿区四谷2-9寿ビル2F TEL 03-3356-3239 TEL 03-6893-4981

■名古屋支店 〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦1-6-5名古屋錦シティビル10F TEL 052-202-0811 TEL 052-202-0812

イノベーションを。こころ躍る未来を。

富士フイルムは、生み出しつつけます。人々の心が躍る革新的な「技術」「製品」「サービス」を。明日のビジネスや生活の可能性を拓けるチカラになるために。

FUJIFILM
Value from Innovation



実り多き第14回LFEC東京研修



和やかな雰囲気の中、各国大使との夕食懇談会



在日イラン大使館を訪れたLFEC東京研修の一行

国際情勢の理解と友好深める

前年に引き続き、充実した催しに。民間外交推進協会(FEC)は昨年11月26日(27日の1泊2日の日程)で第14回LFEC東京研修を開催した。東京、中部、関西の3地区で活躍するLFECのメンバー30余名が一堂に会し大変実りある研修となった。

FECでは平成6年から平成18年までほぼ毎年、LFEC(FEC女性会員の組織)メンバーが相互の親睦を深めるとともに、国会議員、外務省幹部による講演や駐日各国大使らとの交流を通じて国際情勢の理解や各国との友好関係を増進することを目的とする東京研修を開催していたが、諸般の事情で中断。昨年度、8年ぶりに研修を催し大変盛況であったことから今年度も引き続き開催した。

詳細日程は別掲の通り。LFEC一行は、研修1日目にホテル椿山荘東京へ集まり、湯下博之専務理事の挨拶を受けた後、齋木尚子外務省国際法局長を迎えての昼食懇談会、続いて在日フィリピン大使館を訪問。ホテルに戻り駐日各国大使らを迎えての夕食懇談会(パーティー)を行った。夕食懇談会では、昨年を大幅に上回る人数の大使を始めとする外交官をお迎えし大変盛況であった。2日目は在日カナダ大使館を訪問、続いて在日イラン大使館を訪問しレザ・ナザルアーハリ大使自らのプレゼンを受けた後、イラン料理による昼食懇談会、最後にスウェーデンリニ・カクチ日本外国特派員協会会長を迎えての懇談会を行い、東京駅で解散した。今回の東京研修では、前回に引き続きイスラム社会への理解を深めること、またアジアの中で日本について学ぶことを目的としており、大変ハードなスケジュールであったが単なる懇談会や大使館訪問に終わらず参加者一同、国際情勢や

14th LFEC TOKYO MEET



夕食懇談会で挨拶をする松澤理事長

第14回LFEC東京研修日程

月日	場所	時間	研修内容
11 / 26 (木)	ホテル椿山荘東京	11:30	①専務理事挨拶並びにブリーフィング
		12:00	②外務省齋木尚子国際法局長を迎えての昼食懇談会
	フィリピン大使館	15:00	③在日フィリピン共和国大使館訪問
		~16:30	場所: 港区六本木
	ホテル椿山荘東京	18:30	④各国大使・外交官をお招きしての夕食懇談会
		~20:30	会場: 「ウイステリア」 (着席ディナー方式) 【ホテル椿山荘東京泊】
11 / 27 (金)	カナダ大使館	10:00	⑤在日カナダ大使館訪問
		~11:25	場所: 港区赤坂
	イラン大使館	12:00	⑥在日イラン大使館での昼食会
		~14:20	場所: 港区南麻布
	如水会館	15:00	⑦カクチ日本外国特派員協会会長のご講演
		~16:30	場所: 千代田区一ツ橋

外務省・齋木局長が講演



第14回LFEC東京研修の最初の催しとしてホテル椿山荘東京「ヒッコリー」において齋木尚子外務省国際法局長を迎えて「日本外交の現状と課題」をテーマに昼食懇談会を開催した。まず九鬼綾子中部LFEC代表幹事より「齋木様におかれましてはご多忙の中、当懇談会へのご出席を快くお受け頂き感謝申し上げます。最近中東情勢に加え、先般のフランスにおけるテロのように安全と思われていた場所も危険になるなど国際情勢は非常に難しくなっています。本日は時宜を得た興味深いお話を伺えるものと楽しみにしております」と代表挨拶があった。約1時間の講演の後、春日井久子中部LFEC幹事より「本日は素晴らしい大変分りやすく、たおやかな外交のお話を聞くことができ、今後も定期的に齋木様からお話を聞く機会があれば、というのが私も一同の思いです。ご多忙の中、講演を頂きありがとうございます」と謝辞を述べ、閉会した。(B面に講演要旨)

文化・宗教の異なるバイヤーへの調整役

JTCはインド・イランを主要取引相手国とする専門貿易商社です。



http://www.jtcnet.co.jp

大阪市北区中之島3-3-23 中之島ダイビル805号 Tel:(06)4803-8200 Fax:(06)4803-8850 E-mail:since1935@jtcnet.co.jp



FOOTWORK TEAMWORK NETWORKを活かして

阪和興業
http://www.hanwa.co.jp

揺るぎない平和国家 胸を張って

齋木尚子外務省国際法局長の講演要旨

【講演要旨】

2015年は戦後70年という節目の年。1945年以降の日本外交の歩みを振り返ると平和国家として一生懸命努力してきた。日本自身の、さらに地域の平和・安定および繁栄のために歩んできたことは胸を張ってよいことだ。

日本は、「自由」「民主主義」「人権」「法の支配」という重要な価値観をしっかりと守ると同時に、世界の多くの国々がこれを擁護するよう努めてきた。歴史を振り返り損害と苦痛を与えた国にはお詫びし、反省すべきは反省する必要があるが、その一方で立ち止まることなく未来に向かっていくことが日本に求められている。

安倍政権の基本方針と外交

安倍首相は2012年12月に総理大臣に就任以来2年11カ月でのべ83カ国を訪問している。距離にして地球約18・6周。近年、積極的に外国を訪問したのは小泉元首相だが、在任5年5カ月で48カ国だったので、安倍首相が如何に精力的に外交に取り組んでいるかご理解頂けると思う。

14年9月3日閣議決定された基本方針では①復興の加速化②経済の再生③地方の創生④「女性が輝く社会」の実現⑤教育の再生⑥暮らしの安心確保の



齋木尚子外務省国際法局長

外交・安全保障の立て直し⑦項目が掲げられている。実は、外交は⑦にとどまらず、これらすべてに深く関わっている。

地球儀を俯瞰する外交のこれまでの成果を振り返ると、戦略的外国訪問により国際社会における日本のプレゼンスの強化・幅広いネットワークを構築することができ、積極的平和主義・経済外交の展開により国際社会における日本への関心、期待が高まった。そして、女性が輝く社会、法の支配、海洋問題といったグローバル課題への貢献で、日本の復活を印象付けた。一方、テロ、気候変動問題、貧困、大量破壊兵器の拡散、内戦や国際紛争とそれに伴う難民問題等のグローバルな課題について一層の貢献を具体的にのり進めていく。

国家安全保障の確保・推進については平和と安全法制が成立したが、ここで強調したいのは日本の平和国家としての歩み。専守防衛という点についてはいささかの揺るぎもない。国民の命と平和な暮らしを守り、また国際社会の平和と安定に向けて日本としてしっかりと役割を果たしていく。そのためにはまず外交努力により日本の平和を保ち地域の安定を強化していくことが大切。また自衛力の整備も重要。加えて重要なのは日米同盟。TPPも含めて地域、国際社会で連携してリーダーシップを発揮していく重要な同盟だ。

経済外交の3本柱

経済外交の3本柱は次の通り。
①日本に有利な国際経済環境の創出
EPA/FTAは、包括的かつ高いレベルの経済成長の推進力となる。特にTPPは日米がイニシアティブをとってアジア大洋州地域を一つの経済圏

とし、さらに多角的貿易体制の維持・強化に向けて如何にリーダーシップをとれるか、その試金石として評価することもできる。G7やAPEC等国際的なルール作りへの参画も極めて重要である。

②日本の魅力・強みの売り込み
諸外国の成長を日本の成長に取り込んでいくため、官民連携の下、日本企業の海外展開や新幹線、道路、橋といったインフラシステム輸出を推進。このためにトップセールス、ODAの活用も含めたオールジャパンの経済外交を推進する。

③日本経済に必要なものの取り込み
日本はエネルギー・食糧とも海外依存度が極めて高く、エネルギー自給率はOECD加盟国の下から2番目で6%、食料もカロリーベースで6割を輸入に頼っている。特に化石燃料の8割を中東に依存しておりシーレーンの確保が極めて重要。戦略的資源外交を展開するとともに、安定的な農産物市場の形成等により食料安全保障の強化を図る。

「女性が輝く社会」実現へ

今年、世界経済フォーラム(WEF)が発表した男女平等指数で日本は対象145カ国中第101位、女性就業率ではOECD加盟国34カ国中24位。こうした状況を受けて、安倍内閣では「ウーマノミクス」として女性の活躍を推進する取り組みを行っている。外交面では、安倍首相が13年9月の国連総会一般討論演説で、3年間(13~15年)30億ドルを超過するODA実施を表明し13年に約18・6億ドルの支援を実施。また女子就学率改善、職業訓練提供、村落給水整備など、女性を取り巻く生活環境改善支援を強化している。平和と安全保障分野における女性の参画と保護も重要な取組みで昨年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議では、防災における女性の役割と保護についても話し合われ、仙台防災協力のイニシアティブが採択された。女性の潜在的な力は非常に大きいので、女性の活躍推進について外務省としてはLFECCの皆様とも力を合わせ努力していきたい。

長谷川フジ子様(左)、伊藤明子様(右)によるお琴と三味線の演奏



夕食懇談会 華やかに

各国の大使・外交官を招いての夕食懇談会をホテル椿山荘東京「ウイステリア」で開催した。懇談会には在日外交団長であるマンリオ・カテロ駐日サンマリノ共和国大使など、15カ国から総勢20人の大使・大使夫人・外交官と、7名の日本人元大使・大使夫人が出席し、LFECCのメンバーとの交流を深めた。はじめに主催者を代表して、松澤建理事長が「本日は在日外交団長でもあるカテロ大使を始め、多くの外交官に出席頂き感謝したい。また、FECの各委員会の顧問を務めて頂いている大使経験者の皆様にもご出席頂き心より御礼申し上げます。LFECCは25年前の1990年、FECの女性会員が主体になり組織され、『共に集い、共に学び、共に語り、共に楽しく、共に進める国際交流』を台言葉に

「是非」最新、を体験して」 フィリピン大使館訪問

LFECC一行は六本木の在日フィリピン共和国大使館を訪問。ASEAN諸国の中で唯一キリスト教(カトリック)が主流の国であるため、大使館内はクリスマスツリーをはじめ飾りつけがなされ華やかな雰囲気であった。初めにマヌエル・エム・ロペス大使から歓迎の挨拶とフィリピンと日本の関係についてのスピーチがあった。大使は「日本とフィリピンはキリシタン大名高山右近がマニラに追放されて以来約400年の関係があり、先の大戦で3年ほどの中断はあったものの、戦後、双方の交流が進む中で、現在、両国の関係は最良である。1月末には天皇、皇后両陛下がフィリピンを訪問することが決まった。

その後、グアバなどフィリピンの果物を使ったジュースとお菓子を頂きながらロペス大使とリラックスした雰囲気のなかで質疑応答が行われた。LFECC一行の半分以上が既にフィリピンを観光で訪れているが、大使からは「フィリピンは日々進歩、発展している。是非最新のフィリピンをまた体験していただきたい」との言葉があった。

最後に高木恵美子関西LFECC副代表幹事が「この度は、大使館訪問という貴重な機会を頂きありがたく、また大使閣下にお目にかかれて大変光栄だ」と謝辞を述べ、井上美智子関西LFECC副代表幹事から大使に記念品を差し上げ、訪問を終えた。



フィリピン共和国大使館にて、ロペス大使と共に

皇太子夫妻として62年にフィリピンを訪問以来2度目で大変ありがたいことで、フィリピン国民一同、両陛下がおいでになるのを歓迎したい。今後日本とフィリピンの関係がますます深くなることを期待される」との言葉があった。続いて、フィリピンの紹介映画を鑑賞し、文化担当のアンジェリカ C. エスカローナ公使からフィリピンの概要についてのプレゼンテーショ

民間外交を進めてきた。今夕は交流を深めて頂きたい」と挨拶を行った。続いて、石井利枝東京LFECC代表幹事が、「私たちは平和を願う大使館、総領事館との交流を通じて、その国々の経済、歴史、文化を勉強し、友好親善を進めている。今後も交流を進めていきたい」と挨拶を行った。外交団のご紹介の後、カテロ大使のご発声で乾杯を行い、夕食懇談会に入った。懇談は着席ダイナーで行われ、各円卓には各国の外交官が着席し、LFECCのメンバーも日頃話す機会がない外交官との国際交流に会話も大いに弾んだ。

また、懇談会の合間にはアトラクションとして、中台好弘FECアドバイザーによるマジックと気功術が披露され、出席者から喝采を浴びた。また、長谷川フジ子様、伊藤明子様によるお琴、三味線等の演奏は外交官にとって日本の伝統文化に触れるよい機会となった。最後に、鳥羽和江東京LFECC幹事が、「このように素晴らしい夕食懇談会を開催できましたのも皆様のご支援の賜物。今後もLFECCの会員として民間外交を推進して参りますのでご指導のほどお願い申し上げます」と謝辞を述べ、夕食懇談会は幕を閉じた。

The possible will be forever

ShinEtsu Group
長野電子工業株式会社

〒387-8555 千曲市屋代1393 TEL.026-261-3100/FAX.026-261-3131

共に学び進める国際親善交流

カナダ大使館訪問

在日カナダ大使館は、赤坂御用地の向かいという好立地で、清水建設と三菱信託銀行によるコンソーシアムによって資金調達と建設が実施されたもの。三角形をした上層4階を大使館が占め、長方形の基礎部1〜3階は、一部の大使館事務所を除き賃貸されている。一行は地下2階にあるオスカー・ピーターソンシアターに案内され、広報部長であるパトリシア・オックウェル参事官から歓迎の挨拶の後、カナダ観光のプロモーションビデオの上映、広報担当によるカナダの概要についてのプレゼンテーションがあった。

カナダという国については美しい自然にばかり目が行くが、G7の一角を占める先進国であり、移民を積極的に受

世界初の「多文化主義政策」

け入れる多民族国家として世界で初めて「多文化主義政策」(multiculturalism)を導入した国とのこと。LFECCを代表して小松悦子東京LFECC幹事から謝辞が述べられ、山口静佳東京LFECC幹事より記念品の贈呈がなされた。小松幹事は「子息がカナダで物理学の研究をされており、小松幹事自身もカナダをよく訪問するとのエピソードが紹介された。その後、特別展示が行われていた高円宮記念ギャラリー、E・H・ノーマン図書館、入り口近くの「カナダ・ガーデン」を見学した。「カナダ・ガーデン」の石や岩は、大西洋からカンブリア期の楯状地、北極地域、太平洋、ロッキー山脈を通過して太平洋に達する広大なカナダ大陸をデザインしているもの。一行はカナダという国の認識を新たに、訪問を終えた。

イラン・イスラム共和国大使館訪問



イラン大使館にて、ナザルアーハリ大使と

イスラムの文化に触れる

在日イラン・イスラム共和国大使館では、地下にある100名収容のシアター「フェルドゥシーホール」に案内され、はじめに、レザー・ナザルアーハリ駐日イラン大使より



ビュッフェ形式でふるまわれるイラン料理

歓迎の意と、松澤理事長をはじめとする民間外交推進協会の、イランと日本の関係発展へ向けての尽力に対する感謝の意が述べられた。大使自らイランの概要について説明さ



オスカー・ピーターソン シアターでオックウェル参事官から歓迎の挨拶を受ける一行

れ、「長い歴史を有する両国民の文化交流にふれ、二国間関係の一層の発展を望む」とのスピーチがあった。質疑応答ではイランの観光名所や史跡などについての多くの質問に、大使が答えた。

続いて「日章丸事件」に関する映像が上映された。「日章丸事件」とは出光興産社長の出光佐三がイランに対する経済制裁に国際法上の正当性はないと判断し、極秘裏に日章丸をイランに派遣し原油を買い付けたことを指す。日章丸はイラン国中から大歓迎され、以来日本とイランの友情の象徴として考えられている。

この後、近くの大使公邸に移動し、大使をはじめ大使館員とビュッフェ形式にて、普段なかなか食べる機会がないイラン料理を共にした。開放的な部屋で、くつろぎながらいただくイラン料理の味は格別であった。食後は、カフェコーナーにてイランの伝統的な紅茶を頂き、庭園に出て記念撮影をするなど自由な時間を頂いた。

最後に長縄直子中部LFECC幹事より「大使のおもてなしに心から感謝申し上げます。貴国を理解するよい機会となった」と謝辞が述べられた。続いて藤井敦子中部LFECC幹事が大使に記念品を差し上げ、訪問を終えた。

外国人ジャーナリストから見た日本の諸課題

スウェンドリニ・カクチ 日本外国特派員協会会長が講演



研修の最後の催しとして、スウェンドリニ・カクチ日本外国特派員協会会長を講師にお迎えし懇談会を開催した。冒頭、金子恵子東京LFECC幹事より「私は2年前から上海で暮らし始めたことにより客観的に日本が見えてきた。本日はご講演いただきありがとうございます」との挨拶があった。続いてカクチ会長より、ジャーナリストから見た80年以降の日本のアジアでの立ち位置の推移、アジアの女性問題を中心に講演を頂いた。

講演終了後、川崎津東京LFECC幹事より「外国から見た日本、特にアジアの中での立ち位置の推移等大変示唆に富むお話を頂きました。本日の話を今後の活動に活かしていきたい」と謝辞が述べられた。

【講演要旨】 私はスリランカ出身だが30年以上日本に暮らしている。コロンボ大学を卒業後、上智大学に留学、一旦帰国し新聞記者となったが日本が忘れられず、再度来日しJapan Times、共同通信等でジャーナリストとしてのキャリアを積んできた。

まずは、日本とアジアの関係を時系列に俯瞰したい。まず、1980年代の日本像は「経済力がある児童分としての日本」。マレーシアのマハティール首相がとった「ルックイースト政策」は有名。日本は低い労働コストをアジアに求め、アジアの国々は日本からのODAや直接投資を求めるといふ図式だ。90年代には不況により日本のプレゼンスが相対的に低下した時期。従来の図式が変わり中国、韓国が強くなってきた。2000年代に入るとアジアにおける中国の影響は圧倒的に日本の地位は低下した。しかし、アジア諸国からみれば中国、日本の二者択一ではなく、両国とバランスよくやっていきたいというのが本音。東南アジアは単なる労働力の供

給地ではなく、マーケットとしても成熟してきているので、従来の兄弟関係から対等なパートナーに変わろうとしていることに気づいてほしい。

次に、アジアにおける女性について話をしたい。私は2013年バンクレーディッシュの首都ダッカにあるラナプラザ崩壊事故取材した。1千人以上の死者を出したこの惨事で私が心を痛めたのは、その犠牲者のほとんどが縫製工場の女性工員であったこと。朝から晩まで働いて月4千円ほどしか稼げないが、他に働く場所がない。これが華やかなファッション業界の裏側でおきている現実である。

一方、80年代に私が日本に来て驚いたのは、せっかくながら大学を出て、いい会社に入ったにも関わらず結婚すると会社を辞める人が多いこと。また、女性を職場の花と考える意識にも驚いた。私も子育てしながら仕事を続けてきたが、女性はもっと社会進出をし、仕事を続けるべきだ。

最後に、私の属する外国特派員協会と新聞について。今ちょうど曲がり角に来ている。インターネットの普及により新聞を読む人が少なくなり、それに比例して特派員の人数が減っている。最後に残るのは信用、信頼だけ。ジャーナリズムも「破壊から創造へ」という時期を迎えている。

“素材”なら
世界のブランド、
シンエツ。



信越グループは、これからも優れた技術と素材を通じて暮らしや産業、そして社会に貢献していきます。

新たな挑戦へ。
ShinEtsu

〒100-0004 東京都千代田区大手町2-6-1(朝日生命大手町ビル)
電話(03)3246-5091(広報部) http://www.shinetsu.co.jp 信越化学工業株式会社

輝く女性 草の根活動も力になれば

第13回から再開されたLFEC東京研修も14回目を迎え、ますます充実した研修でした。初日の外務省国際法局長、齋木尚子先生の「日本外交の現状と課題」では、私たちの草の根活動が少しでもお役に立てているのか考えさせられました。日本も今は齋木先生のような女性のトップが世界で活躍してらっしゃることを本当にうれしく感じました。親日国のフィリピン共和国大使館ではマニエル・エム・ロペス大使をはじめ、大使館職員の方々の歓迎をいただき、和やかなひと時を過ごさせていただきました。

翌日は、カナダ大使館を訪問後、イラン・イスラム共和国大使館を訪問、レザー・ナザルアーハリ大使からのおもてなし！ 沢山の難問を抱えられている国の大使とは思えないほど温厚で、素晴らしい立ち振る舞いに感動いたしました。珍しいイラン料理を昼食に頂き、会員の皆様との交流を深めながらイラン大使館を後にしました。

最後に如水会館にてスウェンドリニ・カクチ日本外国特派員協会会長をお迎えして「外国人ジャーナリストから見た日本の諸課題」「民間外交における女性の役割」と題してご講演を頂き、私たち民間外交における役割の大切さもますます感じさせられました。

今回の研修では、女性の活躍が華々しく、私たちの草の根活動も小さな力になればと心より願っております。



関西LFEC副代表幹事

高木 恵美子

東京LFEC前代表幹事

石井 利枝

本年も第14回LFEC東京研修がホテル椿山荘東京で開催されました。東京、中部、関西支部の各地より30余名のメンバーが集まりました。最初に湯下専務理事のご挨拶があり、その後、齋木尚子外務省国際法局長をお迎えしての昼食懇談会が行われました。齋木局長はシャープかつ穏やかに「日本外交の現状と課題」をテーマにご講演頂きました。まず、安倍政権の基本方針と外交について説明頂き、国際世論の流れを作り出す外交、世界に日本をアピールするには経済力と同時に、文化など日本のソフトパワーを高めていくことが重要とお話ご印象に残りました。



続いてフィリピン大使館を訪問し、ロペス大使閣下に温かくお迎え頂きました。文化担当公使よりフィリピンの概要と現状についてスライドを使ってのプレゼンテーションがありました。観光情報についてもご説明頂き、大使閣下からは質疑応答の中で、夕刻よりホテル椿山荘東京に於いて、外交団長である駐日サンマリノ大使閣下をはじめ各国の大使閣下、外交官、来賓の方々のご臨席のもと、70名の笑顔と緊張の中、夕食懇談会のパーティーが催され、皆新しい出会いに感激いたしました。

2日目、カナダ大使館は近代的な建物で、入り口のテラスにあるカナダ・ガーデン、夕刻よりホテル椿山荘東京に於いて、外交団長をはじめ各国の大使閣下、外交官、来賓の方々のご臨席のもと、70名の笑顔と緊張の中、夕食懇談会のパーティーが催され、皆新しい出会いに感激いたしました。

代表幹事所感

中部LFEC代表幹事

九鬼 綾子

第14回東京研修は、私たちが会員が通常の生活においては経験ができないような、大変貴重なものであったと言えましょう。昨年は、LFEC東京研修が8年ぶりに再開され、東京、関西、中部の会員が久しぶりに一堂に会しましたが、その時の貴重な経験や学習した内容、また、各国の大使館の皆様との有意義な交流や3地域の会員同士の楽しい情報交換等を通じ、一度参加した会員は、是非次回も参加したいという気持ちになったと思います。

中部LFECでも早い時期から、今年度の研修の日時や内容について情報がほしいという声が多く聞かれました。期待に違わ



ず、今回の研修は、スケジュールの組み方や事務局の皆様のかな気配りもとてもよき、ご講演者の人選から訪問大使館などのプログラム、そして、多くの国からの大使の皆様との夕食懇談会など全てが満足できるものでした。今回スケジュールの都合で

貴重な体験 新たな発見に感激

次には石造のオブジェが並び大変よい眺めでした。カナダの公用語は英語とフランス語ですが多民族を受け入れる多文化主義を世界で初めて導入した国であるとの説明を受けました。

次に訪問したのはイラン大使館ですが、この訪問により私のイランに対する認識が大きく変わりました。ナザルアーハリ大使閣下自らイランの概要についてご説明頂き温かくもてなして頂きました。また、戦後間もないころ石油を国有化し英国と対立していたイランに出光興産社長の出光佐三が極秘裏にタンカーで石油を買い付けした日章丸事件についての短編映画を鑑賞しました。日章丸事件は日本とイランの友好の象徴だそうぞです。

最後に、カクチ日本外国特派員協会会長の講演があり、日本と海外の報道の違いや日本とアジアについてのお話を頂きました。

2日間の貴重な体験で新たに参加した方々もいろいろな発見に感激し、多くの知識を得ることができ喜んでいました。この会が長く続くよう祈念しております。

交流で得た「大きな財産」

参加が叶わなかった会員にも、広くこの内容を伝えていきたいと感じています。

世界情勢や日本を取り巻く環境が、十分安定しているとはいえない昨今ですが、このような活動を通じて、民間外交の重要性などを再認識致しました。地理的に遠かったり、日常では接点が多くなかったりする国々の皆様と直接交流し、独自の文化や食べ物に触れ、人々の動く様子を垣間見ること、その国との距離が縮まり、先入観や一方的な誤解が解けることは、一人ひとりにとって大きな財産になると強く感じています。ただ、ニュースを聞いたり、読んだりだけでは掴めないような、存在する各国の人々の暮らしが実感として確認できるようなことが、重要だと思えます。来年も、一人でも多くの会員が東京研修に参加できることを期待してやみません。

LFEC東京研修の参加者

(敬称略)

- 【東京LFEC】
- 石井 利枝 前代表幹事
 - 野田 智子 幹事
 - 鈴木 順子 幹事
 - 鳥羽 和江 幹事
 - 小松 悦子 幹事
 - 山口 静佳 幹事
 - 金子 恵子 幹事
 - 川島 奈津 幹事
 - 井原 明子
 - 植木 裕子
 - 佐々木久美子
 - 友成 富美
 - 水崎 朝恵
- 【中部LFEC】
- 九鬼 綾子 代表幹事
 - 春日井以久子 幹事

- 長縄 直子 幹事
 - 藤井 敦子 幹事
 - 横井 元子 幹事
 - 井上 千代映
 - 井上 直子
 - 河村 都以
 - 岸 真理
 - 西山 英子
 - 樋口 慶子
 - 廣田 梅香
 - 赤澤 きみ
 - 松本久美子
- 【関西LFEC】
- 高木恵美子 副代表幹事
 - 井上美智子 副代表幹事
 - 植田 早苗
 - 山野 佳子

夕食懇談会の出席者

- 【大使・大使夫人・外交官】
- マンリオ・カデロ 駐日サンマリノ共和国大使・在日本外交団長
 - サウル・アラナ・カステジョン 駐日ニカラガ共和国大使
 - ラドゥ・ペトル・シェルパン 駐日ルーマニア大使
 - ルート・カハノフ 駐日イスラエル大使
 - ノールマンズ・ペンケ 駐日ラトビア共和国大使
 - イーホル・ハルチェンコ 駐日ウクライナ大使
 - シェール・ニヤング 駐日セネガル共和国大使
 - アイサッタ・サル・ニヤング 駐日セネガル共和国大使夫人
 - アンジェリカ C. エスカローナ 駐日フィリピン共和国大使館公使
 - アブデルカデル・ジャムーシー 駐日モロッコ王国大使館次席、公使参事官
 - モナ・ワハド 駐日モロッコ王国大使館公使参事官夫人
 - ディミトリ・ブリチェフスキー 駐日ロシア連邦大使館公使参事官
 - ナルミーナ・アスラノヴァ 駐日アゼルバイジャン共和国大使館次席、参事官
 - シャールック・エドリスアバディ 駐日イラン・イスラム共和国大使館参事官
 - エンフバト・ウヌルジャルガル 駐日モンゴル国大使館経済担当理事官
 - ナダ・アルシャマルリ 駐日イラク共和国大使館一等書記官
 - アミナス・シャズリー・サリーム 駐日モルディブ共和国大使館二等書記官
 - ダンダル・ハルン 駐日モンゴル国大使館文化交流担当官
- 【日本人元大使・大使夫人】
- 谷野 作太郎 元駐中華人民共和国大使
 - 圭子 谷野大使夫人
 - 隆也 元駐イラン・イスラム共和国大使
 - 文明 元駐カンボジア王国大使
 - 渡邊 真美 高橋文明様ご令妹、元駐アルジェリア民主人民共和国大使夫人
 - 森 敏光 元駐カザフスタン共和国大使
 - 森 智香子 森大使夫人

三浦 瑠麗



わが思い

2016年の世界を展望したとき、鍵となる考え方が「新・勢力均衡」の時代の幕開けだ。戦後の国際社会は、1990年前後までは概ね「冷戦」の論理で動き、そこからの25年間は「冷戦後」という時代が続いた。

冷戦では資本主義と共産主義の対立に目が行きがちだが、より本質的だったのは米ソの二大国が世界を仕切っていたという事実だ。

陣営内では一定の原則に基づく統治が行われ、陣営外の世界に対しても冷戦の論理に基づく意味付けがなされた。したがって西側陣営の日独が経済大国として浮上り米ソ覇権に不安が生じたときには、覇権によって

平和が実現するという覇権安定論が流行した。覇権安定論にそのまま首肯はできないにしても、そこには一面の真実が含まれていた。陣営内の統治と緊密な安保・経済関係こそが、陣営内の平和を強化してきたという側面があるからだ。

「新・勢力均衡」時代

冷戦後の世界は、米中動きを知る上でおさえるべき対象も限定されてきた。対して新・勢力均衡の時代とは予測可能性が薄れていく時代だ。

中東の混乱には出口が全く見えない。十単位の死者を出し、1千万単位の難民を生んでいる戦争が進行しているにも関わらず、ロシアとの

対立や協力関係さえはつきりしない。現地の諸勢力の実態は流動的で、中東の地域大国の動向も同様だ。

東アジアでは中国が着々と力をつけている。共産党一党独裁体制を続ける新・超大国は地域覇権を求め、国際社会が慣れ親しんでいた国際法とは異なる論理で行動している。その中国でさえ、国内には巨大な矛盾を抱えている。新・勢力均衡の時代に、世界はマイナスにもプラスにも展開する可能性を宿している。

時代を定義する不安定という本質の中にはチャンス概念も含まれているからだ。国家も個人も独自の基軸をもって進んでいかなければならない時代がやってくる。

(国際政治学者)

協力隊に見る日本の若者の姿

小松原 雅子

(いまじゅり まさこ)

平成23年度3次隊。歯科衛生士。トンガ・パプア島の保健省に勤務。小学校を巡回し歯磨き指導を行うなど歯科健康教育に従事。

トンガの離島の小学校で歯科検診を行う小松原さん(左)

虫歯予防 小学校で啓蒙活動

トンガ

どこまでも続く青い空と海、鮮やかな花々、輝く太陽の下で暮らすトンガの人々の笑顔は本当にまぶしかったです。人口はたった10万人。トンガは国の小さなゆえ産業が発展せず、ほとんどの物資を輸入に頼っている。働き先がないため失業者も多い。決して裕福な国ではない。しかし、彼らから貧しさを感ぜさせられたことはなかった。いつも底抜けに明るく、家族との結びつきを何よりも大事にしていた。職がないため近隣の先進国に出稼ぎに行き、トンガにいる家族のために仕送りをして



ている者も多い。家族と離ればなれになるのはとても寂しいことだと言っている。私も、単身で赴任している私を皆が気遣って、よく食事や招待してくれて、私が「いつも食べ物などをもらってばかりいて悪いね」などと話すと、「もううちことよりも誰かに分け与えることができるほうが幸せだ」という言葉が返ってきた。日本のような便利な生活はないが、彼らの心の豊かさから幸せの本質に気づかされた。

私は、トンガの国立病院の歯科に派遣され、主に虫歯予防の啓蒙活動に従事していた。トンガの子供たちの虫歯保有率は97%であり、歯のほとんどが

虫歯になっている子供も珍しくない。背景には先進国から菓子やジュースの輸入が増えたにもかかわらず、歯磨きの習慣がきちんとできていないという問題があった。私はこの状況に危機感を持ち、小学校を巡回しながら、生活指導や歯磨き指導と虫歯予防のための

子供たちの笑顔

元気をもらった

フッ素洗口を子供たちに行っていた。私と同僚はこの活動をマリマリプログラムと呼んでいた。マリマリとはトンガ語で笑顔という意味だ。虫歯を減らすことで子供たちにもっと笑顔をもたらしたい、そんな思いで始まった活動だが、私自身が子供たちの笑顔にいつもたくさん元気をもらっていた。

帰国後は、協力隊赴任前に働いていた歯科医院に復職し、健康な歯の維持のための指導、治療に携わっている。ここでも、健康な歯から人々を笑顔にできるような仕事をしたという気持ちには変わらない。仕事以外にも学校から依頼を受け、国際協力や協力隊の経験について話す機会をもらっている。とても小さな活動ではあると思うが、私の経験談から一人でも多くの人が国際協力や世界に目を向けるきっかけになってくれればいいと思っている。

論点

昨年末、12月28日に岸田外相と韓国の尹炳世(ユン・ビョング)外相がソウルで会談し、両国関係を妨げてきた従軍慰安婦問題について「最終的かつ不可逆的に解決する」合意が得られたことは、快挙であった。未だ韓国内に反対の声があり、かならずしも予断を許さないとはいえ、日韓関係に一つの転機が画されたことは間違いない。北朝鮮の核実験を踏まえての安全保障上の課題一つをとってみても日韓両国が良好な関係を保って協力を進めることの必要性は極めて大きいことが明らかであり、これを機会に両国関係が未来志向、相互利益志向の関係に変わるよう、両国政府のみならず、メディアや国民が頭を切り換えて努力することが大切である。そのためには、個々の問題についてだけ関心を集中させるのではなく、長い歴史を通じての両国間の人的交流の事実等にも目を当て、相互に総合的な文脈で相手を見るように視点をリセットすることが大切である。

続いて、お正月の休みに日本・トルコ合作映画「海難1890」を見て、外国との関係を見る視点についてさらに考えさせられた。この映画は、1890年に和歌山県沖で起きたトルコの軍艦エルトゥール号の遭難事件に際しての地元の人たちの献身的な救援活動を中心とする日本の官民の対応がトルコの人たちに深い感銘を与えて語り継がれ、その結果、95年後の1985年にイラン・イラク戦争でイランのテヘランから脱出しようとした日本人が航空便がなくて窮していた時に、トルコ政府が特別機を飛ばせて間一髪のリスクをおかして日本人を全員救出してくれた事実を映画化したものである。いずれも感動的な出来事であり、国家関係がこのような人間愛で結ばれていけば、道を誤ったり、感情的な対立を招いたりすることを防げるのではないであろうか。このような事実は広く国民の間に周知させ、語り継がれる必要がある。その点、上記の実話は日本ではあまり知られておらず、残念というよりは問題である。学校の教科書がこのような事実を積極的にとり上げるよう官民こそして奨励し、それにより国民に広く知られるようにできないであろうか。

日本は、今年から2年間国連の安全保障理事会非常任理事国であり、5月には伊勢志摩サミットで主要国首脳会議の議長を勤める。日中韓首脳会議も日本で開催される。このような状況を踏まえて、安倍首相は「日本が国際社会において外交をリードしていく年にしなければならぬ」と述べておられると報じられている。是非そうしていただきたいが、どのような方向にリードするかについては、当面の諸問題への取り組みを優先することは当然としても、併せて心の通った国際親善交流等による多文化共生を可能にする長期的な取組みへの方向づけをも期待したいものである。(編集部顧問・湯下博之)

対外関係の視点

思いをかたちに、化学で未来を。
人や時代、環境により化学会社への要望はさまざまです。私たち東亜合成は、常にそれらの課題を真摯に見つめ、応えてまいりました。
人や社会が求める無限の思いに、東亜合成は化学のチカラで未来をつかってまいります。

東亜合成株式会社
〒105-8419 東京都港区西新橋1-14-1 TEL: 03-3597-7215 FAX: 03-3597-7218
URL: http://www.toagosei.co.jp

ALways Security OK

ALSOK

新潟総合警備保障株式会社
〒950-8633 新潟市東区小金町1丁目17番20号
TEL 025-274-1965 FAX 025-271-3445
http://www.nii-alsok.co.jp/

「良い関係の日台、交流強化に努めたい」

FECの松澤理事長と湯下博之専務理事は昨年12月14日、台北駐日経済文化代表処の沈斯淳代表と張淑玲政治部長を招いて、ANAインターコンチネンタル東京にて昼食を共にして懇談した。

沈斯淳代表より「日本と台湾は、1972年に公的な関係がなくなつて以降、現在が一番良い関係にある。最近も租税協定を含む3つの協定が結ばれ、日台間の交流がますます容易になっている。今後、FECとの関係をさらに緊密化し、日台間の交流の強化に努めたい」との挨拶があった。

松澤理事長が、2016年1月の台湾総統選挙後の状況等について、研究会での講演を依頼したのに対し、沈代表からは喜んでお引き受けしたいとの返事があ

り、「選挙の結果がどんなものであっても、台湾の日本に対する姿勢は一貫して変わらない」と語った。

また、沈代表は「台湾から老人ホームの視察団が次々と来日しており、この年末にも視察団を老人ホームに案内することになっている。日本は高齢化社会の最先端を走っているで、老人ホームの制度などが進んでいる。台湾はこれからそういった福祉の充実を図らなければならない段階なので、日本からいろいろ学びたい」と今後の抱負を述べた。

懇談は政治経済の話のみならず、正月の過ごし方など、くつろいだ雰囲気で行われた。

台北駐日経済文化代表処 沈斯淳代表・張淑玲政治部長招き昼食会



昼食を共にして懇談した沈斯淳代表(左)と松澤理事長

「インドでお待ちしています」

(右から)渡部日印文化経済委員会委員長、八木駐ドイツ大使、平松駐インド大使、湯下専務理事



新旧駐インド大使を訪問

昨年12月16日、一昨年に引き続き、1月25日より第10次インド訪問団団長を務める渡部賢一日印文化経済委員会委員長・野村ホールディングス(株)常任顧問と湯下博之FEC専務理事は、外務省に新旧駐インド大使を訪ねた。

八木毅氏(新駐ドイツ大使、前駐インド大使)に新任のお祝いを述べるとともに、一昨年訪問時にお世話になったことへの礼を述べ、平松賢司氏(新駐インド大使)には今回訪問する際のご協力をお願いした。

両大使は、FECの活動を評価する旨述べるとともに、平松大使からは、「インドで皆さんをお待ちしている」との歓迎の言葉があった。

ベトナム大使を訪問

訪問団の成功に祝意

▽1月5日 在日ベトナム大使館

対話の場を設けてくださり、その上、大変充実した内容の意見交換

昨年11月に第10次ベトナム訪問団の団長を務めた中垣喜彦FEC副会長(日越文化経済委員会委員長・電源開発(株)名誉顧問)と同訪問団顧問、湯下博之FEC専務理事はクオン・クオック・クオン駐日ベトナム大使を訪問し(ソング使他同席)、先のベトナム訪問団の結果報告及び日程調整についてのクオン大使の積極的な協力に感謝の意を伝えた。クオン大使は、ベトナム訪問団の成功を祝い、今後ともFECとの協力関係を強めていきたいと述べた。中垣団長から、特にチュオン・タン・サン国家主席が5年連続して訪問団との



(右から) ソン公使、クオン駐日大使、中垣団長、湯下顧問

であったことに、サン国家主席に謝意を伝えていたがたいと述べた。それに対しクオン大使は、サン国家主席への伝達を約束するとともに、ベトナムではFECは全ての関係などに良く知られていると述べた。

中垣団長より、次回訪問団について、ベトナム新政権発足後の9月くらいではどうかと大使の考えを問うたところ、大使は、「具体的には今後相談していきたいが、ベトナムでは6月の国会で新政権が発足し、11月になると主要な国際会議で首脳陣が多忙になるので、9月頃というのは良い時期だと思ふ」とのことであった。

さらに、中垣団長から、「ベトナム経済の現状と今後について」の意見書をベトナム語訳と共に手渡したところ、大使は、「このような提言を歓迎し、今後とも協議をしていきたい」と述べた。

FEC 活動日誌

1月の主な行事

- 5日 ◇中垣第10次FECベトナム訪問団団長らが訪問団事後報告のためクオン駐日ベトナム大使を訪問
- 14日 ◇第10次ベトナム訪問団報告会
- 18日 ◇第10次インド訪問団事前説明会
- 19日 ◇スウェンドリニ・カクチ日本外国特派員協会会長を招いて第193回国際問題懇談会
◇常任理事会
- 20日 ◇松澤FEC理事長らがアゼルバイジャン共和国大使館を訪問
- 25日 ◇第10次インド訪問団(2月2日まで)
◇松澤理事長らがミャンマー連邦共和国独立記念祝賀会に出席
- 26日 ◇ナザルアーハリ駐日イラン大使を招いて第67回中東研究会

2月の催しのご案内

- ◆18日(木)12時~14時 第66回アセアン研究会
講師 チア・キムター駐日カンボジア王国大使
主 題 カンボジア情勢と日本・カンボジア関係の展望
会 場 ホテル椿山荘東京タワー棟8階「コスモス」
- ◆23日(火)14時~16時 第34回米国研究会
講師 渡辺靖(やすし)慶應義塾大学環境情報学部教授
主 題 米国の外交政策の変容と日米関係
会 場 如水会館1階「コンファレンスルーム」
- ◆28日(日)~3月5日(土) 第18次アセアン訪問団
- ◆3月1日(火)14時~15時30分 FEC東京国際セミナー
講師 河野(かわの)克俊統合幕僚長
主 題 「日本の安全保障を考える『我が国を取り巻く安全保障環境と自衛隊の統合運用』」
会 場 帝国ホテル東京本館2階「孔雀西の間」

協会だより

【新個人会員】

- ▽東京都 田丸誠氏
- ▽愛知県 服部篤氏
- ▽兵庫県 中嶋正義氏

告知

中国ミッションを北京他に派遣
民間外交推進協会(FEC)は松澤建理事長を団長とし、4月24日から30日の7日間の日程で中国ミッションを派遣予定です。

※詳細、最新情報は本協会ホームページ (<http://www.fec-ais.com>) をご覧いただくか、事務局(電話03-3433-1122)にお問い合わせ下さい。ホームページから「開催案内」をダウンロードし、FAXにてお申し込みいただけます。いずれも定員に達し次第締め切りとさせていただきますので予めご了承ください。